

知夜古 朽木

やつてられないな。小さく独り言を言い、腕を三角巾で吊り下げながら歩く。最近、見慣れてきたバス通りには、半分ほど黄色く色づいたイチョウの木が5メートル間隔で植えてある。太陽は傾いて、道路に僕の大きな影を作りだす。

ここ数カ月、良いことが何も無い。いや、悪いこと以外は何も思いつかない。

バイト先では立て続けに皿を割ってしまった。クビになり、頑張つて勉強した必修単位は名前を書き忘れて落とし、大学進学前から付き合っていた彼女には「新しい彼氏できたから」と振られ、おまけに、これ以上悪いことを起こすまいと、目の前を横切ろうとした黒猫を追いかけて、派手に転んで左腕を折ってしまった。今は、腕を見てもらっている整形外科に行った帰りだ。

確かに、皿を割ってしまったのはこの折れた鈍くさい腕だし、必修単位を落としたのもこの折れた頭の悪い腕だし、彼女に振られる原因となったメッセージを送ったのもこの折れた女心のわからない腕だし、骨を折ってしまったのも転んだ時にうまく受け身をとれない折れた運動音痴の腕である。けれども、あんまりじゃあないか。何もここまで悪いことが続くこともないだろう。例えば、すべてがこの腕のせいだとしても、だ。

思い出せば、昔からいいことがない。いろいろと不運はあるが、特に覚えているのは、自転車に石に乗りあげ転び、頭を打ち付けてしまって、頭を何針も縫う怪我をしたことだ。僕は直接見てはいないが、写真で傷を見せてもらった。ずいぶん大きいもので今でも残っている。

バス停に着いて、次の便の時間を確認する。ああ、まだ。2分前に前の便が行ってしまった。

僕の住んでいる(オンボロ)アパートから病院までは、

バスで十五分程度のところにある。歩くには少し遠い。最寄りの駅の沿線に病院はあるにはあるが、さらに遠くになってしまふ。要はバスの運賃のほうが安いのだ。

次の便は二十分後だ。備え付けのベンチに腰を掛けて、ぼけーっとバスを待つ。何か良いことないかな。自動販売機のお釣りのところに小銭が入つてるとかき。立ち上がった、道路の向かいの自販機に確かめに行った。

……お、あつた。期待していなかっただけにうれしい気持ちより、驚きの方が大きい。しかも、側面に凹凸がある、いわゆるギザギザつてやつだ。

たまには良いこともあるな。いや、これはネコババで良いことではないけど、と財布に収めた。これを機に風向きが良くなればいいな。そんなくだらないことをしたり、考えたりしたら、目当てのバスが来たので乗り込んだ。

バスの中には、じいさんばあさんが数人、一番後ろの端に中学生が一人座っているだけだった。僕も適当に窓際に座つて、他の人と同じように外を眺めていた。

病院に通うようになってから、気になってることがある。バスのルートには川幅十メートルほど川に架かった橋があるのだが、そこを通るときに見える三階建てのアパートに、何故か青い旗がついているのだ。細かく言うとうと、三階の角部屋のベランダにだけ、ついている。何の意味があるのだろうか。なんかの宗教かな。

橙色の夕日のなかにあるだけに、青色はとても目立っている。といっても、見えるのが数秒程度なので、あまり興味を持つてはいなかった。

橋を渡りきるとバスの窓は、特徴もない街並みと僕の虚像を映していた。

\*

会計でお待ちの四辻さん、と受付の女性が僕の名前を呼んだ。骨を折ってからの病院には、週に一回のペースで通っている。あまり大きいところではないので、先生にはもちろん、受付の人にも、顔は覚えられてしまう。

受付が僕の顔を認めると、石膏でできたギブスを一瞬不思議そうに見つめ、事務的に今日の診察代を告げた。不審に思った僕は、お金を払った後、ギブスを見た理由を聞いた。

バス停までの道で、さっき聞いたことを整理していた。受付の人が言うにはこうだ。受付の人が昼休憩の時間に病院近くのコンビニまで向かっていた時、僕を見かけたのだそうだ。昼ご飯をタマゴサンドにしようか、ツナマヨおにぎりにしようか、いや、蕎麦も悪くないぞ（受付の人は少しおしゃべりな人であった）と悩んでいたの、しっかりと確認はしなかったものの、顔は絶対に僕そのもので、不思議なことに三角巾やギブスもつけずに歩いていったようである。

まず、僕がこの時間帯にこの病院付近にいることは、まじめに落とした単位を取り返そうと授業に出ていることからありえない。

次に、ギブスを外せるのはもう二、三週間先だ、と先生に言われており、外そうにも、石膏でできたギブスは僕の腕の形にしっかりとついていて、無理に外そうとすれば、関節が一つ増えることとなるだろう。

このことから、この人物が限りなく僕に似ていたとしても、僕自身ではないことはわかってもらえらるだろう。

この後も、彼女は患者があまりいないのをいいことに、一つ上の階の住民の足音がうるさいとか、実家の近所

の双子の話が続いていた。そっくりさんの話じゃあないので適当に聞き流していたけれども、双子の話が少し引つかかった。もしかして、僕には生き別れの双子でもいるのだろうか。

まあ、両親が隠していない限りそんなことはなく、僕は中流家庭の四人兄弟の三番目だ。そんな劇的な存在がいる人間ではない。そんなことをぼーっと考えていたら、側溝を踏み抜いてしまった。足がびしょびしょで気持ち悪い。最悪だ。

今日はバス停に付くとちょうどバスが目の前に現れてくれた。また窓際の席に座る。病院には授業の後に行くので、いつも夕方になってしまう。

バスが橋に差し掛かると、何となく、外に目を向ける。橋を渡る歩行者が数人居て、あのアパートには、やはり青い旗が付いている。

橋を渡りきるとバスの窓は、特徴もない街並みと僕の虚像を映していた。

\*

四辻、お前彼女に振られたっつってたよな、と同級生の五味が話しかけてきた。五味とは、彼女に振られたことは話して、焼き肉まで奢ってもらった仲だし、僕はそんなくだらない嘘はつかないつもりだ。あれが嘘じゃないことは五味にだってわかっているはずだ。彼は焼き肉を奢った次の日に、僕の醜態にドン引いていたからだ。

どうしてそんなことを聞いてきたのだろうか。一緒に昼ご飯を食べながら話を聞いてみることにした。

「四辻、そういえば、この前の土産どうした。ちゃんと飾ってるか」

「あのヘンテコな石細工か。玄関に飾ってあるよ、どこで買ってきたんだあんなの」

五味は旅行好きで、短い土日を活用していろいろなところに行っている。そしてたまにお土産なんかをくれるのだが、これが変なものばかりで扱いに困っている。

「露天商から買ったやつだ、それ。なかなかカッコイイだろう」

「今度からそこのご当地品とかにしてくれないか。せめて重量的に軽いものでさ、重いぞあれ。いや、そんなことじゃなくてどうしてあんなこと聞いたんだ」

昼ご飯は蕎麦屋にした。蕎麦は蕎麦でも安い蕎麦だが。「そんなことってなんだよ、感謝しろよな。えっとな、一昨日にさ、見ちゃったんだよね。あ、俺テンプラ蕎麦のあったかいので」

「かけそばの温かいのでお願いします。見たっていったいどこで何を見たのさ」

五味はもったいぶる。さっさと言ってくれ。そう長い昼休みではない。

「一昨日にさ、うちの大学の最寄りから何駅かのところに大きい街あるじゃん」

「まあ、知らないやつはいないだろうな」  
金欠の僕はそこに用はないけど、こちら辺では一番大きくて、活気のある町だ。

「そこでさ、冬服買おうかなってテキトーに服屋いっばいある大通りぶらついてたら反対の歩道にお前が歩いてたんだよ。四辻お前あそこ行かないだろ」

「本当にそれ僕なのか。絶対に行かないとは言わないけど、一昨日なんて」

一昨日、五味の言ってる時間には家で録画したドラマを見ていた。証明してくれる奴なんかいないが、今は、

アリバイは必要ないだろう。

「だろ。だから珍しいなって思っ」

どうしてそんなところに。ソックリにはソックリの生活があるのだから、どこにいても問題ないけれど、どうして僕の行動範囲近くに出てくるんだ。

はい、かけそばと天ぷら蕎麦ね、と店のおばさんが僕らの前にそばを置いた。ここは商品提供の速さだけは一流である。

「声かけようかとも思っただけど、反対側だしさ。そっうだ、ホントーに彼女と別れたのか」

僕は蕎麦に店備え付けの七味唐辛子を振りかける。

「本当だって、メッセージだって見せし、グズグズになったのも見ただろ。……その天ぷら半分くれよ」

僕は店備え付けの七味を振りかける

「嫌だよ俺だし、自分で頼めよ。まあそうなんだけどさ……。そこでさ見ちゃったんだよ、お前が彼女と歩いてるところ」

僕は七味を振りかける。

「そんなバカな」

ありえない。彼女の家は、僕の地元のところでここからまあまあ遠い県にあり、来れなくもないが、わざわざここまで来るのだろうか。しかも、僕のそっくりに会うために。

僕は。

「そんぐらいにしとけてお前」

今、僕のかけそばは出汁の茶色と唐辛子の赤の割合が二対八ぐらいになっている。

「いやいや、もつとかけたほうがおいしいんだけど」

「ホントいつか変な病気で死ぬぞお前」

五味は大きいため息をついた。

「話を戻すけど、ホントだって。何回お前に写真見せられたと思っただよ。おかげで、彼女の睫毛の本数まで言えるわ。より戻したんなら言えよな。あ、けど焼肉代もったいなかったな、返してもらおうかなあ」

訳が分からない。このことを聞こうにも、最後に彼女に送ったメッセージはもちろん、未来永劫、アプリのサービスが終わっても既読が付くことはないだろう。

「いちそうさま。ほら行くぞ」

気づけば五味はもう食べ終わっている。僕は残り半分ぐらいを流し込んだ。授業の時間が近づいている。店を出ると五味が最後に振り返って言った。

「そーいやお前、デートに着ていく服ぐらい考えろよな。あれはないぞ。あの真つ青のシャツはさあ」

授業が終わった後、病院までの道のりで、五味から聞いた話をずっと考えていた。

五味は確かに、彼女の写真を散々見せられているので、間違っことはないだろう。

そもそも、本当に彼女なのだろうか。五味の目を疑う訳ではないが、その子も彼女のそっくりだということも。

いや、そんな僕のそっくりと彼女のそっくりが出会う確率なんて、そんな……。

五味から聞いた話をこねくり回していたら、病院に着いていた。

診察は簡単なもので、レントゲンを撮って、先生と、痛みはないですか、とか話して、終わりだ。腕の状態は良好で、二週間後には、ギプスを取って添え木に代えてくれるそうだ。取った後の腕が細くなっているのは少し怖い気もするが、風呂に入りにくいことこの上ないので、

大分うれしい。

今日の受付はおしゃべりなあの人ではなかったの、スムーズに会計を終える。

病院を出ると、もうほとんど色づいてきたイチヨウが並んでいる。大通りにイチヨウを植える理由って何なんだろう。そりゃ、見た目は悪くないけど。

ベンチで、バスが来るのを待つて乗り込んだ。今日も窓際の席に座って外を眺める。

五味が最後に気になることを言っていた。ソックリの服装についてだ。そいつは真つ青なシャツを着ていたらしい。僕はそんな原色のシャツを着たことがないので、五味の記憶にも残っていたみたいだ。

青と言えは……、外を見るとちようど橋に差し掛かったところだ。あのアパートには、まだ青い旗が付いている。妙に引つかかる。これも偶然だろうか。

橋を渡りきるとバスの窓は、特徴もない街並みと僕の虚像を映していた。

\*

今日も、簡単な診察を終えて、イチヨウの木の横を歩いていく。

五味の話聞いてからは、ソックリの話は聞かない。当たり前だが、別に僕の生活範囲内にわざと出てくる理由なんてないのだし、もう二度と見ないこともあるだろう。繁華街なんて行くやつは行くもんだ。

しかし、そんなにも似ているのか。いつも僕といる五味でさえ見間違えるのだから、相当なものだろう。少しだけ見てみたい気もするが、顔以外の趣味とか性格とかも一緒だったら怖いので、やっぱりやめとこう。

ただ、最近の僕はいろいろとついていないのだ。嫌だな、と思った矢先に向かいの通りに見慣れた僕の顔が歩いているのだから。

あちらはこつちに気づいていないようだ。それにしても似ている。ほとんど僕だ。いや、まったく僕だと言つてもいい。そして、五味から聞いたとおりに真つ青なシャツを着ている。おまけに、靴まで青い。

バスが来ているのが見えていたけれど、僕はソックリの後ろをつけることにした。何となくそうする気になった。そうした方が良い気さえしている。これは犯罪なのだろうか。バスを見送って、ソックリから数十メートル離れて歩いた。

僕にはわからないが、見る人が見たら後ろ姿も似ているのだろうか。ソックリは振り返らずに、どんどん進んでいく。行く場所が決まっているのか。もういい時間だし、家に帰っているのかもしれない。

予想に反して、ソックリは蕎麦屋に吸い込まれていった。券売機で買うタイプの安い店だ。

ここで終わりかとも思ったが、店の中を少し覗いた感じ、最近の店に多い、ついたてばかりの店だったので、僕も入ることにした。昨今のプライバシー意識の高さがありがたい。

券売機で一番安いざるそばの券を買って、席に着いた。ソックリは、少しかがむとついたての下から見る事が出来る。

店にいる客は僕の顔が二つあることに気付かず、無心無表情で蕎麦をすすっている。ざるそばがすぐに運ばれてきた。ソックリはおいしそうなかき揚げの乗った蕎麦を頼んだらしい。うらやましい、僕よりいいものを食べている。同じ顔にも経済格差があるようだ。

おまけ程度のわさびとネギをつゆに入れてちびちびとざるそばを食べる。ソックリの方を窺うと、こじやれた木の入れ物に入った七味唐辛子を延々と蕎麦に振りかけている。味の好みまで同じなのか。アイツはどこまで僕と同じなのだろう。

傍から見るとすごい不健康そうな行為だな、あれ。真つ赤なそばを食べ終わったソックリの後をまたつける。振り返る様子は全くない。

そのままついていくと、例の橋が見えてきた。橋の上で見られると面倒なので手前で見守る。

それにしても、ソックリの鈍感さは何なものか。それとも実際につけられる側はこんなものなのだろうか。逆に、こつちに気づいたうえで振り返りもしないのか。

そう思うと全部バカバカしく思えてきた。僕はいったい何をしているのだろうか。世界には自分と同じ顔が二つはあるというじゃないか。それがたまたま近くにいるからと言って、実害があるわけじゃない。

アイツに目を向けると橋の終わりまで行っている。今になって気づいたが、ソックリは振り返らないどころか、左右すら見ていない。前だけを向いて歩いている。非人間めいていて不気味な奴だ。

ソックリは橋を渡り終えるとすぐに曲がってしまった。その曲がり角は……。

やはり、急いで追いかけることにした。そっちは青い旗が付いているアパートの方面だ。ソックリと旗には関係があるのか。

姿は見失ってしまったが、迷わずアパートの方へと走った。まだ追いつけるはずだ。

居た。ソックリは階段をゆつくり上っている。旗のアパートは川の反対側にドアと階段があり、川の

流れの音、少し遠くから橋の上を車が走る音が聞こえる。外壁はクリーム色で、妙にのっぺりした印象を受けるが特に変哲もない建物だ。

アイツは三階への段に足をかけている。ひっそりと素早くアパートに近寄り、階段を上がって影から様子を窺う。期待を裏切ることなく、角の、青の旗がついた部屋の前に立った。

鍵を取り出すのかと思つたが、インターホンを鳴らした。自分の家じゃないのか。

周囲は、太陽が沈みかけた藍色の空を電灯が照らし始めている。この管理人は怠惰な性格なのか蛍光灯がパチパチとついたり消えたりを繰り返すのが見受けられる影になってアイツの表情を読み取るのが難しい。

それにしても、インターホンを鳴らすなら誰か他にいるのか。ほどなくして扉が開けられた。出迎えたのは僕の元彼女だった。まさか同棲！？

数カ月前まで僕に向けられていた笑顔がアイツに向けられている。眩暈を覚えた。彼女を悪く言うつもりはないが、いったい何がしたいのだろうか。振った奴と同じ顔の奴と一緒に暮らすなんて。

アイツが瞬間的にこちらに首を向けた、可動式フィギュアのようにグリツと。一度もよそ見をすることがなかったから油断していた。

金縛りにあつたように動くことが出来ない。こちらに笑いかけてくる。見慣れている顔のはずなのに強烈な違和感。初めて笑ったかのようにぎこちない。けれども、意思は伝わってくる。ソックリは僕を嘲笑っている。

つけていることがばれていた、と瞬時に理解した。しかし、アイツは僕に何をしてもなく、彼女に腕をとられて部屋の中に入ってしまった。

ふらふらと近くのバス停へと歩きはじめる。別に、こちらに危害を加えてくるわけではない。なに、放っておけばいいのさ。

そう自分を落ち着けてみるものの、嫌な予感がしてならない。ソックリならともかく、彼女まで偶然なわけがない。

来たバスに乗り込んで、いつもと同じ席に座る。

バスの窓は、特徴もない街並みと僕の青ざめた虚像を映していた。

\*

あれから、ソックリは僕の周りに頻繁に出没するようになった。学校に、通学路に、家に、家の近くの商店街に現れる。

いや、本当は出てきていないことはわかっている。それらは全部鏡や窓に映った僕自身の姿だ。しかし、窓の前を通るとき、そこにアイツがいるようで気が気ではないのだ。

ソックリは、こっちに気づいたうえであのアパートまでつけさせたに違いない。あのゾツとする笑いは、僕の脳裏に強く焼き付いている。

いったい何が目的なのか。五味がまた真つ青な僕（のそっくり）を見かけたようだから、映ったのが僕自身だと思っても窓の向こうにいる可能性は十分にある。

その所為で、ここ一週間はノイローゼ気味だ。今は病院に行くバスに乗っている。窓に僕が映っているが、歩道にアイツがいるようで怖い。

バスを降りてからの道は、街路樹のみで反射するようなものはないのだけど、ついビクビクと歩いてしまう。

五味にも不審な目で見られてしまった。

病院は、入り口に姿見があるだけで他に映るものはない。もちろん順番待ちの椅子にもアイツはいない。

今日はギプスが外してもらえる日だ。先生が奥から電動の小さい丸鋸を持ってくる。意外と怖いもの持ってくるな。スイッチが入るとキーンと甲高い音を立てて回り始めた。

ギプスごと僕の腕まで切ってしまったのか、とバカな妄想をして一人勝手に不安になる。鋸でついた傷は治りにくいらしい。

そんなグロテスクなこともなく、無事にギプスがとられた。出てきた腕は、垢にまみれ、最後に見た時より幾分か細くなっている。看護婦の持ってきた温かいタオルで拭くと、いくらか見た目も気分も良くなった。

次に病院に来るのは二週間後でいいそうだ。こうやって見てもらう頻度が少なくなっていくって、治っていくのだろう。

あの受付の女性が、またアイツの話をしてきた。今度は、日曜のスーパーで見かけたそうだ。僕はもうその話は聞きたくない。適当に相槌を打って、さっさと会計を済ませた。

外に出ると空気が冷たい。夕方ということもあるだろうが、最近秋がずいぶん短くなって、すぐに冬が来てしまっている気がする。

もうそろそろ、五味のように冬服を買わなければ服に明るいらしいし、見立ててもらおうか。

バス停にはアイツの影はなく、バスの中にもない。神経質すぎるだろうか。しかし、できれば二度と会いたくない。

橋を通る際に、例のアパートが見える方とは反対側の

席に座る。西日が入ってきて好きではないが、あちら側に座ったって入っては来るし、とにかく、青い旗から意識を離れたかった。

橋を通っている間、努めてそちら側を見ないようにし、朱色の夕陽を見ていた。

橋を渡りきるとバスの窓は、特徴もない街並みと僕の虚像を映していた。

僕の住んでいるアパートは、防音性の低い木製のドアに、メッキのドアノブが付いたもので、よく静電気が溜まる。

鍵を取り出して開ける。独り暮らしをしようのは、家の暗さだ。実家では、誰かが絶対家にいて、電気がついていたものだが、今は、夜に帰ってこようものなら、部屋の奥まで確認ができない。夕方だって部屋は薄ぼんやりとしか見えない。窓のつきかたが悪いのだ。

ドアから入ってすぐ横には洗面所があって、アクリルのドアを隔てて浴槽がある。

そこには日が全く入らないので、電気をつけなければ暗いもののアイツが、じゃなくて僕の映った鏡が少しだけ見える。

僕がこの顔である限り、ずっとアイツの影を意識して暮らしていかなければならないのか。

やってられるか。ただでさえ最近ついてないんだ。激情に駆られて、玄関先に飾ってあった石細工を鏡に向かつて投げつけた。

しまった、と思った時にはもう遅かった。

鏡にひびが入って酷く耳障りな音を立てて崩れる場面が浮かんだ。

が、そうはならなかった。代わりにゴスツ、と鈍い音と立て、赤いひびが鏡にゆつくりと広がり、鏡はそのま  
ま前に倒れこんだ。

すぐに、洗面所の電気をつけた。何が起きたのか理解  
が追いつかない。そこには額から血を流したアイツが横  
たわっていた。

いつの間に、どうやって入ってきたんだ。いや、そん  
なことは目の前の現象に対して、まったく重要ではない。  
何を目的としてここにいるんだ。吐き気をどうにか堪え  
顔を覗き込んだ。

額は、パツクリと割れ、真っ赤な血がドクドクと溢れだ  
している。眼は、もうすでに生氣のないガラス玉と化し  
ている。

死んだのか。

顔から血の気が引いていく音を初めて聞いた。どうす  
る。どうすればいい。頭の中がグシャグシャになってい  
た。まさか、殺してしまうなんて。こいつの着た青い  
シャツに赤が滲んでいく。

洗面所にへたり込んで、十分ぐらいブーツとしていた  
が、とりあえず通報することにした。よくよく考えれば、  
勝手に家に入っていたのはこいつなのだ。警察には、強  
盗にあつて手元にあつたもので応戦したら勢い余つて殺  
してしまった、とか言えば問題ないのではないだろうか。  
膝に力を入れて立ち上がろうとした時、ソックリの頭  
針も縫つたような跡がちらと見える。それは僕と小さい  
ころにつけたのと同じような傷。

通報は結局まだしていない。確かめたいことが出来た

からだ。アイツのポケットには財布が入っていたので押  
借し、調べさせてもらった。身分の証明できるものがない  
かと思つたからだだが、結果だけを見ると、死んだこい  
つはまったく僕と同一人物だった。保険証は生年月日か  
ら親の勤め先まですべて同じで、同じ学校の学生証まで  
持つていた。僕のお気に入りのバンドのコンサートチケ  
ット（席番号が同じ）など、財布から二枚とあるはずの  
ないものばかり出てきた。全てしつかりと作られていて  
とても偽物には見えない。

死体をそのままにして、出てきた。何となく目立ちた  
くはなかつたので、あのアパートに歩いて向かつてい  
る。だいぶ冷え込んできた。外套を羽織つてくるべきだ  
つたと後悔している。

僕はあそこに何をしに行くのだろう。アイツの素性、  
生活、秘密を調べに行くのか、それを知つてどうすると  
いうのだ。

もしかしたら、僕は、彼女にもう一度会いたいただけ  
のかもしれない。アイツと僕とを間違つて、笑いかけて  
くれるかもな。

少々、歩くには遠かつたが、アパートの前に着いた。  
月光に当たつて、青白く浮かんでは、また元ののつぺり  
とした建物に戻る。まだ夜が深くもないのに、ここから  
はテレビの音や夕飯を作る音などの生活音が聞こえない。  
いいアパートなのか、あまり人が住んでいないのか判別  
がつかない。階段を上ると、蛍光灯は変えられて、並ん  
だドアを照らしている。

三階の角部屋、ここだ。表札はかけられていないが、  
他のドアも同じなので、そういうところなのだろう。又  
はこれもプライバシー意識の向上の結果なのだろうか。

僕は少し迷つて、インターホンを押した。後々のこと  
を考えると得策ではなかつたが、たぶん、僕は彼女にア  
イツと見間違えてほしかったのだ。

やはり、僕はついていない。期待は空しく外れ、中か  
ら何の反応もない。正確に言えば、無視しよう、だとか、  
今料理中で手が離せないわ、とかの気配も音もしない。

留守か。何の気なしにドアノブを回すと、なんと開い  
てしまった。鍵はかけていないようだ。入つてもいいの  
だろうか。家主はあんな状態で、伺いも立てられない。

アイツも僕の家に入つたのだからおあいこだな  
上がらせてもらうことにした。中は、廊下に扉が三つ  
いていて、おそらく、手前から洗面所、寝室、リビング  
だろう。靴箱には靴一つない。

電気をつけずに廊下を進んで、リビングに通じている  
だろう扉を開けた。

そこには、何もなかつた。テーブルも椅子も、テレビ  
もソファも、家具一式何もない。キッチンにはフライパ  
ン一つない。冷蔵庫すらも置いていない。カーテンの開  
いた窓に月明かりが斜めから入っている。ベランダには  
青い旗が括りつけられ、今は萎んでいる。

アイツはどうやって暮らしていたのだ。彼女と一緒に  
ここに住んでいたのではないのか。今思うと留守とは言  
え、女の人が住んでいる部屋に靴が全くないのはおかし  
なことじゃないか。彼女も人並みにいろいろな靴を持っ  
ていたはずだ。

廊下に戻つて、寝室の扉に手をかける。そこには家具  
があるにはあつた。けれども、この部屋に似合うベッド  
などではなく、真ん中にさも当然かのように大きい盗見  
が立っていた。

暗闇に目が慣れたのもあるが、リビングを通つてくる

月光がこの部屋をうつすらと見えるようにしてくれている。備え付きのクローゼットを見たが、服は一着もかかっている。

洗面所も見したが、ここにも何もなかった。

アイツの所有物はこの姿見だけのようだ。これに何の意味があるのか。見当もつかない。

特別な装飾が施してあるわけでも、後ろに何か彫つたりもしない普通の鏡だ。

前に立つても、僕を映すだけ。これじゃアイツが何者なのか全くわからない。

もう一回リビングに何かないか探しに行こうと振り向いたとき、姿見に異常を感じた。もう一度前に立つても、さつき感じた異常はない。

さつきの違和感は気のせいじゃない。けれども、確認しても何の問題もない。何を感じたのか、よく思い出すと以前も同じ感覚を抱いたような。

思いだした、あのときだ。アイツをつけた後に、階段の影にいた僕を見て笑ったときのような感覚。

ポケットからスマホを取り出した。確認しないほうがいい、と思いつつもやめられなかった。姿見に背を向け、カメラモードを起動する。内カメラにして、肩越しに姿

見が映るように。

予想は予想でも、悪いものだけは当たらない。姿見に映っているものは、僕の背中ではなく、正面、こっちをじっと見据えた僕、ちがう、アイツだった。口を不器用に曲げた。アイツはあれで笑っているつもりなのだろうか。

月明かりが急に強くなったのか、目の前が青くなってくる。姿見の方を振り返っても、もう僕のこと映していない。死んだはずのアイツを映したままだ。

鏡の中からこちらに歩いてくる。割れたはずの額には何の痕もない。

ボタン、と寝室の扉がひとりりで閉じて、光源の月光を奪う。なのに、視界は青いままだ。

アイツが鏡面に手を伸ばす。

ドアノブをいくらひねっても開く様子がない。鍵なんてないはずなのに、扉が接着剤で固定されたかのようだ。

鏡面は、アイツの手の形に、腕の形に薄い膜を作つてこちらに伸びてきている。

自分はここから出ることは出来ない。そんな簡単なことに今更気づいた。

「誰か、聞こえないのか、出してくれ、誰か、ここから出してくれ、だれか、だれか」

力いっぱい叫んだが、何も起こらない。

振り向いて鏡を見ると同時に、薄い膜を作っていた鏡面がはじけた。

青だけが僕には見えていた。

\*

じゃあ次の診察は半年後ね、と先生が言った。ぼくの腕は、骨折などなかったように戻った。

ぼくは日常を手に入れた。単位だつてこのままなら安泰だし、バイト先は五味に紹介してもらつて、前より給料だつていい。彼女はいいけど、そのうち出来るような、もうこりこりのような。

外はもうすっかり冬だ。イチヨウの木に残った葉は数えることが出来る。

「すまんすまん、お待たせ。会計のおばさんにつかまっちゃつてさあ」

「別に同じ病院じゃなくなつてよかつたんじゃないか」「いやいや、知ってるやつが行つてる病院の方が安心つてもんだからな、知らない土地は特に」

五味も、タンスの角に小指をぶつけるというテンプレートな不運で、骨折をしていた。そしてなぜかぼくと同じ病院に通っている。

「次の診察、半年後だからもう一緒に来ないぞ」

「いいんだよ、べつに」

松葉つえをついて不便そうなので、バッグを持ってやることにした。

「おつ、悪いな。はー、にしても寒いよな、冬が近いって感じるなあ」

バッグが異様に重い。学校にいったい何持つてきてんだ、こいつは。

「ヒミツだよ」  
こつちの思っていることを見透かすように言う。実際に当たっているのだから怖い。

バスと一緒に乗り込んだ。席は、いつも通り窓際。明日の授業について話していたら、急に五味が、

「おい、四辻。なんだあれ、旗？」  
と窓の外を指さした。アパートの角部屋に青い旗が膨らんでいる。

「どこだ、わからない」

「あそこだつて、あそこ。あー、過ぎちゃつた」

五味は興味を失つたのか、スマホを取り出して、いじり始めた。

橋を渡りきるとバスの窓は、特徴もない街並みを映していた。